

佳作

## 本当の合格

兵庫県 神戸市立湊が森小学校四年 田内 湧心

「あんなにがんばってたのにな。」

兄の中学受験の結果がでた時、ぼくはそう思った。母は兄がようち園の弟と一緒にふろに入っている声を聞きながら、キッチンのおすみっこで泣いていた。ぼくは大丈夫じゃないと分かっていたけれど、

「お母さん、大丈夫。」

としかかける言葉が見つからなかった。

兄が中学受験をしたいと言ってじゅくに通い始めたのは、四年生の十一月だった。兄は勉強する気まんまんだったが、ぼくには考えられないりょうの宿題が出たり、休みの日も昼と夜二食のおべん当を持ってじゅくに行かなければならず大へんそうに見えた。小学生がじゅくで昼ごはんも夜ごはんも食べているなんてぜったいにおかしいとぼくは思った。いったいいつ遊んだり自分の時間をもつつもりなんだ

ろう。ぼくは考え事をしながら「ボーツ」としたり、自分の空想の中で遊んだりするのがすきだ。そんなぼくには時間がなくて考え事ができない生活なんてたえられない。

なぜ兄は学校から帰ったらわずかな時間でじゅくに行って勉強する生活をしているんだろう。しかもじゅくから帰ってきたらじゅくの友達や先生の話で、両親を相手に一人でしばらくもり上がっている。いったい何がそんなに楽しいのかぼくにはふしぎだった。そんな兄も受験する日が近づくと学校の宿題を見るやいなやすぐに、

「こんな時間ないのに。ただでさえ時間がないのに。」

とのこされた時間が少ない事をなげき、早く自分の勉強がしたいという気持ちで全面に出していた。

そしてついに兄の第一志望の受験の朝がやってきた。ぼくと弟は祖父母の家で兄の受験が終わるのを待った。兄は小さいころからいばっていてはらが立つ事も多かったけど、ちゃんと努力をして力をつけるタイプだ。受験でよい結果ができればいいとぼくは思っていた。だから兄の不合格を聞いた時ぞんねんで努力していた兄がかわいそうになった。でも兄は

不合格を知った夜に「明日は最後の中学受験を楽しむ」とじゅくの手帳に書きこんで次の日には別の中学の受験に向かった。そして今合格した中学に毎日楽しく通っている。第一志望に受からなかった事を全然くよくよしていない。

ぼくから見たらしんどそうに見えたじゅく通い、それは兄にとって自分と同じ目標を持つ友達と一緒に学べる大切な場所だったようだ。勉強することで兄はなりたいた自分に近づける事がうれしかったのかもしれない。だからいつもじゅくから帰ってきたら活き活きしていたんだなと今は思う。最後まであきらめずに強い心で受験会場に向かった兄はやっぱりすごいしカッコいい。第一志望は合格しなかったけれど、ぼくの心の中では自分の目標に向かって一生けん命努力した兄はじゅく分合格だ。